

---

# 零の軌跡 一つの奇跡

天剣

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

零の軌跡 一つの奇跡

### 【Nコード】

N3709W

### 【作者名】

天剣

### 【あらすじ】

貿易都市クロスベルー。様々な問題を抱えるこの都市に、とある男が現れる。

遊撃士でも警察でもない彼が引き起こす、一つの軌跡。そして、そこから起こる新しい奇跡ー。

## プロローグ（前書き）

ということを書いてみました、零の軌跡。

キーワードにあるよう、作者は空はuridしかやっておりますん。

そんなとこご了承ください。

## プロローグ

「逃げたぞ、追えー！」

広大な大地を持つゼムリア大陸。そのとある国で叫び声が上がった。

”導力”と言う神秘的な原動力を発見してから早五十年。紆余曲折あつたが、今では人々の生活に欠かせない存在となっている。

「…まだ遠くへは行っていない。早く探すぞ」

その叫びの命令を受け、黒衣を纏った男が手早く指示を出す。命令を受けた彼の部下と思しい黒衣の男達は、フードを目深にかぶるなり一斉に四方八方に散らばって行った。

「はあ、はあ…」

男達からかなり離れたとある森。そこで、男達と同じく黒衣を纏った男―背丈から少年か。が、息もたえたえになって木によしかかっていた。

「はあ、はあ…。…クソったれ！」

やがて堪えられなくなったのか、左腕を押さえながらドスンと地べたに座り込んだ。同時、罵りながら長い吐息を吐く。着ている服が黒なので目立たないが、左袖には大量の血で濡れていた。ぎゅっと絞ればポタポタと赤い液体が垂れてくるだろう。

息を殺し、気配を隠しつつ辺り一帯に万遍なく目をやり様子を伺う。が、微かにタンツと何かが跳ねる音が聞こえ、少年はハツと目を見開いた。

「ち………！」

舌打ちを一つして、少年はバツと駆け出す。ただそこから、そこに来る者達から逃げるように。

「はあ、はあ、はあ」

荒く息を吐きながら少年は当てもなく走り続けた。だが、どれだけ走っても後ろから感じる気配は消えそうもない。

しかたなく、少年は懐に手を入れ、筒状の何かを取り出した。筒の上の方にある輪を、動かない左腕の指に引っかけ一気に引き抜く。そして、それを後ろの遠くの方へと放り投げた。

とたん、後ろからバシュツと言う空気が抜ける音が響き渡り。

後ろから迫っていた追跡者の数名の気配が消えた。しかし、全員ではない。そのことが少年をさらに追い立てる。

(くっ……。このままじゃ……)

苦しい表情を浮かべたまま、少年は走り続ける。

——ザア………——

突然、何かの音が聞こえた。それが何なのか少年にはわからなかったが、どこかで聞いた音だなと思い。その音が聞こえた方へと進行方向を変えた。

しばらくすると、それが見えた。

「……っ！」

いきなり森を抜け、音が聞こえた方——つまり下を見た。断崖絶壁——そこは崖であった。

その崖の下には川が流れており、彼が聞き取ったのはその音だった。逃げ道には絶好の機会だが、ゾツとするほどの高さがある。

「クソ、なんでこんな時に！」

苛立ちに顔を歪ませ、それと同時に何かを感じ取り、少年は後ろを振り返る。そこには、例の男達がいた。

男達はゆっくりと少年に近づき、それと比例するかのようには後ろに下がっていく。

だが、少年の後ろには崖。さほど下がる訳もなく、絶壁のギリギリにまでしか下がれない。

(……万事休すか……)

近づいてくる男達を見ながら、少年は汗を流して彼等の様子を伺う。男達は少年を囲うように立ち並び、彼を逃がさんとする。

そのうち、男達の一人が少年に一歩近づき、

「……戻ってこい。お前ほどの——を失うのは」

「生憎だけど」

男の言葉を遮り、少年は遙か下方で聞こえる川の音を聞きながら続ける。

「もう、俺はやらない。ーは、もう……」

僅かに苦痛の表情を浮かべ、少年は忌ま忌ましそうに言うが、男は淡々と呟いた。

「今さらそんな戯言が通じると思っているのか」

ある男は鼻で笑い吐き捨てた。

「いいから早く戻ってこい。このままだと、我等はお前を殺さなければならなくなる」

少年と最も親しかった一人が、得物を片手に声をかけてきた。

「……戻ってきてくれ」

友人の辛く不安が滲み出た、掠れた声。ただそれだけで、彼が本気で心配しているのがわかった。その言葉を聞き、少年は目を僅かに伏せ、しかし、それでも男達に反抗する。

「…もう決めたんだ。だからー」

そう言って、少年は後ろにはずり下がる。

「っ！待て！」

親しかった男が手を伸ばし止めようとする。が、無情にもその手を

すり抜けて少年は落ちていく。

「―――！」

友人の叫び声を微かに聞き、しかし耳元で唸る空気を裂く音がそれを邪魔する。そして少年は川に落ちる衝撃をもろに受け、意識を手放した。

一つの軌跡は、ここから始まる。

やって来たクロスベル（前書き）

どうも、連続投稿した天剣です。

いや、今回短いですよ。

## やって来たクロスベル

「はい、これで入国手続きは終わりましたよ」

「ありがとうございます」

「良い旅を。……これからどちらへ？」

クロスベル自治州の東口と言っても過言ではないタンegram門。そこで彼、アルスト・コーデイは入国手続きを受けていた。

透けるような短めの金髪を頭に巻いたバンダナで立てており、耳元から流れ落ちるもみあげが特徴的か。

そんな彼、周りの観光客とは違い、もろに旅人のような格好をしている。バスを使わず歩いてきたことからそれもそれが伺えるだろう。

彼が歩いてきたのを見ていた受付の男性ータンegram門の警備隊員が苦笑いを浮かべたほどだ。

アルストは隊員の問い掛けに笑いながら答えた。

「ん〜。まあ、色々ですね。クロスベルは故郷みたいなもんですし、久しぶりの里帰りかな」

「そうですね。……どうやら、歩き慣れているみたいですね」

隊員が納得したように頷き、一人で結論づける。最も、その通りなので反論はないが。

「ところで、あそこでは何やっているんですか？」

そう言いながらとある一点を指さした。つられてその隊員もそちらの方を見る。が、隊員の方はそれを見るなりあくど頷き、

「新人達の演習ですよ」

「いや、どう見ても警備隊には見えない奴らがいるんだが」

アルストの指摘は正しかった。何せ、隊員達は皆制服（？）を着ているのに、指を差した四人だけはまるつきり違つ。と言つか。

「……あれ？」

どこかで見た気がする。特にあの茶髪の奴。

内心で首をひねりながらも、その彼の様子には気づいていない隊員が、親切に教えてくれた。

「ああ、彼らは警察の方達です。最近新設されたばかりの部署で”特務支援課”ですよ」

隊員の言葉を聞いて、アルストの脳裏に引っかかる物があった。

（何だろう、どっかで聞いたよな）

今度は実際に首をひねり、「ん〜？」と一人唸る。そんな彼を見て、隊員が物珍しそうにアルストを見やった。

「？ どうしました？」

「いや、特務支援課……。どっかで聞いた気がして……」

再び唸りながら考え込み、彼らの方を見ていたが、その見た気がする茶髪の奴のことを思い出した。すると、数珠つなぎのように特務支援課のことも思い出す。

「あああー!!」

アルストが突然上げた叫び声。それを近くで聞き、迷惑そうに隊員が僅かに顔をしかめながら声をかけた。

「どうしたんですか?」

「……………」

アルストはその問いかけに答えられなかった。何せ、その茶髪の奴ーロイド・バニングスは、彼の親友なのだから。

(そう言えば……………警察に入ったとか何とかって、手紙に書いてあったな)

ようやく思い出したのか、彼と彼の同僚と、新人隊員の戦闘をながめながら軽く笑みを漏らす。とにかく、あれが終わったら話しかけよう。そう誓ったアルストだった。

再会、そしてー

「お疲れ」

ロイド達特務支援課は、警備隊の新人達の演習に支援要請を受け、訓練に参加。それが終わった後、ソーニヤ福司令と会話し激励の言葉を貰い、丁度門を出た所だった。

突然、パンパンと手を叩く音と共に後ろから声をかけられた。見たこともない青年だった。バンダナをつけた長めのもみあげが特徴的である。

「誰だあ、お前」

四人の中では一番年長者である赤毛の青年ーランディが振り返るなりそう問いかけた。

「俺か？俺はただ単の旅人だよ。風の吹くまま気の向くまま、あっちこっちにちさっち回るな」

相手は笑って律儀に答えてくれたが、後半どう考えてもふざけているようにしか聞こえない返事に、四人は苦笑いを浮かべた。

「え、えっと……てあれ？」

それを聞き、ロイドは何と声をかけたら良いか迷うが、その人物に見覚えがあり首を傾げる。口を閉ざした彼に、

「ロイド？」

「ロイドさん？」

「どうした？」

と、仲間達が声をかける。

「……………」

が、それに答えずポカーンと固まったままのロイドに、バンダナの青年は顔をしかめた。

若干低くなつた声音で、

「おい…………まさか忘れてたつて言うんじゃないだろうな」

「え、えつと……。…どこかで、お会いしました…よね？」

「オイコラ。なぜに疑問符使う」

遠回しに忘れたと言うロイドに対し、バンダナ男はジト目で彼を睨む。

「い、いや、どこかで会つたような気がする……………。…………もしかしてアルスト？」

半ば首を傾げたが、ようやく思い出したのか確信に満ちた声音で呟く。その呟きを聞き、アルストはやつとかよとため息をついた。

「そつだよ、アルストだ。…………忘れてただろ？」

「…………久しぶりだなアル！」

「オイコラ」

アルストの文句を完全スルーし、素直に喜びを表すロイドを見て、彼はギツと睨む。が、すぐにため息をついて、

「まあいいや。で、そちらは？」

なにやら蚊帳の外にほっぽかされた三人がひそひそと言葉を交わしている。

(ご友人でしょうか)

(そうみたい。でも、観光客とはちょっと違うわね)

(ありやどつちかと言うと旅人の方があつてるな。ま、色々回ってきたと言うことは確かみたいだ)

「……見窄らしい格好してるからか？」

(そうですね)

(そうですね)

(そうだな)

「オイコラー！」

テイオ、エリイ、ランディの三人に(紹介はロイドが勝手にした)、自分が誘導させたとは言え、失礼なことを言つてのけたので一喝。ビクツと肩を振るわせ、恐る恐るこちらを向いた三人をジロツと睨む。

「初対面の奴に失礼なことは言わんようにな」

「今のはお前が言わせんたんだろ……」

ビシツと指さして言うアルストに、ロイドは呆れたふうに呟いた。

「ところで気になっていたんですが、誰なんですか？」

「ああ、俺はアルスト・コーディだよ。こいつの幼なじみ」

そんな中、テイオが名前を聞き、アルストはそれに答えながら隣のロイドを指さす。

「まあ、よろしく。特務支援課の皆さん」

そう言っただけで彼はニヤツと笑った。

~~~~~

クロスベル市に向かうバスの中、アルストは早くも支援課のみんなと打ち解けていた。

「歳いくつ？」

その質問に、エリイ、テイオ、ランディが答えていく。

「18歳よ」とエリイ。

「14です」とテイオ。

「21だ」とランディ。

「へ〜、やっぱり見た目道り歳近いんだ〜。……って、14？」

アルストの訝しむような目つきをスルーして、テイオは「はい」と答える。アルスト自身としては、ギリギリ日曜学校を卒業したあたりかと思っただけだ。

「それで、一体どちらに行っていたんですか？」

何か事情があるんだろうかと首を捻るアルストに、彼女の隣のエリイから問いかけられた。

「ああ、共和国とか、帝国とか。マジで色々だよ。それと口調丁寧にしなくて良いぞ。同い年なんだし」

「ふふ、わかったわ」

ため息混じりの答えに、彼女は微笑みながら頷いた。正直、丁寧口調だとムズかゆく感じるのであまり好きではない。

と、それを聞いていたランディがほーっと感心しながら、

「大国二つに行ってきたのかい。ずいぶんと度胸があるじゃねえか」  
「まあ、このご時世じゃないとやれないからな。共和国と帝国を行き来すんのは」

リベールで結ばれた不戦条約がなければ、二大大国を行き来するのはかなり大変だっただろう。それこそ、今ではないと思うが、スパイ容疑で強制的に捕まったりだとか。  
実際、結ばれた今でも厳しかったのだ。その時の様子を思い出し、アルストはため息をついた。

「それでも、一度行って見たかったからな。このクロスベルを挟む二大大国は」

自嘲的に笑いながら、アルストはそう言った。そんな彼に、ロイドが思案顔で、

「だけど、どうやって帝国の方に行ったんだ？ 行った当初は不戦条約なんて結ばれてなかっただろ。最初は共和国にいたみたいだけど……」

「条約が結ばれた時は、共和国にいたよ。そんで結ばれた後、帝国の方に行っただけ。手紙に書いてなかったか？」

心底不思議そうな表情をするアルスト。そんな彼にロイドはしばらく考えた後、

「書いてなかったと思う。帝国に行ったとは一言も」

「……うん、ワリイ。そう言えば一言も書いてなかったな」

はははと苦笑いを浮かべる彼を見やり、ランディはフツと笑いながら、

「そう言う大事なことは書いといた方がいいぞ、アル」

「うん、反省するよ。それと何故にアル呼ばわり」

「いや、アルストよりはそっちの方が呼びやすいからな」

それにロイドも呼んでたし、とちゃっかり付け加えるところがこの人らしいというか。そうしている内に、エリィやティオまでもがそれに便乗する。

「そうね、アルストよりは呼びやすいわ」

「よろしくお願いします、アルさん」

「……名前の文句は俺じゃなくてお袋に言ってくれ」

ふうつとため息をつき、アルストは毎度の事ながら諦めた。

「……お、そろそろ付くみたいだぜ」

その一言に、五人はそちらを、つまりはクロスベル市の東口を見や  
った。

(三年……か)

懐かしさがこみ上げてくるそれを見て、アルストは目を閉じた。長いようで短かった三年。その内にここはどれほど変わったのだろうか。

「とりあえず、世話になった人に挨拶回りだな」

置いていた荷物を持ち上げながら呟き、こちらを見てきた四人に言う。

「じゃ、ここでお別れだ。支援要請、頑張ってこいよ」

そう言って、シュタツとおざなりに敬礼もどきをした。

クロスベル散歩日記 b yアリスト(前書き)

碧発売まで残り15日!

2週間と一日だぜ!!

## クロスベル散歩日記 byアルスト

「うわー、随分変わったな」

それがアルストの第一声だった。

クロスベル。彼が知る町並みとは大きく変わり、その巨大さに圧倒される。とりあえず中央広場まで出てみたが、その前の東道りさえ凄じい変わりようだったのだ。

広場に出たアルストが、呆然と固まるのは仕方ない事だった。

「こりゃ全部変わったんじゃ……って、変わってない物があった」

辺りを見渡し、他と比べるとオンボロにしか見えないビルに目をやり、そう呟いた。ちなみに、彼の幼なじみが現在そこに住んでいることを知らない。

「…挨拶回り行ってくつか」

しばらくそうやって呆然としていたが、ハッと我に帰り、頭を振って歩き出した。

~~~~~

「…相変わらずの機械オタクだな」

「……アル、何か言った？」

「ゴメンナサイ何でもありません」（即答）

オーバルストアに就職したウェンディに、思わず、と言った感じで

そう呟いた。

……帰ってきたのは凍てついた笑顔である。その笑みに並々ならぬ恐怖を覚え、即座に謝った。男のプライド云々が全く感じられない。本人曰くプライドで飯が食えるかポケ！ である。そんなアルストを見て、ウエンディはため息をついた。

「何かこのやり取りやった覚えがあるんだけど」

「はっ？」

「まあいいわ。あ、そうだ」

何かを思い出したようにパツと顔を輝かせ、カウンター越しにアルストに詰め寄ってきた。

「ねえアル、まだあの戦術オーブメント使ってるの？」

「あ、ああ。まあ」

彼女の勢いに押され、アルストは一步後ずさりしそうになる。ちなみに、アルストが使っているオーブメントは一世代前のやつ。これでも十分なのだが、今回ウエンディはそれを見て思案顔になり、ある物を進めてきた。  
それは――

「第五世代オーブメント、通称”エニグマ”……」

アルストはその追加機能をポケットとした表情で聞いていた。要するに、オーブメントと導力通信を兼ね備えた便利アイテムらしい。中々便利だと思うが、一つ疑問が浮かんでくる。  
何でそんな物を自分に売るのが。

「アンタのそれ、かなり使い込んでいるし。もうそろそろ替え時じ

やない？」

「……確かに」

よくよく見たら、アルストが持っているオーブメントはずいぶんと使い込まれていて、若干危険な香りがしている。

実際、旅の途中で魔物と戦っているとき、いきなり動かなくなったりしている。この際、思い切って買い換えた方が良いのかもしれない。と言うかそうしよう。

「それ、お幾ら？」

決心が固まると、アルストは値段を聞き、若干顔をしかめた。が、一世代前のオーブメントを持つてくると、サービスしてくれるらしい。

ありがたやありがたやと内心で思いながら、エニグマを購入した。

~~~~~

「お前ずいぶん変わったな。1490ミラ」

「そうか？ どの辺が変わったんだよ？ 1200」

「……そうだな、強いて言うなら雰囲気かな。1480ミラ」

「雰囲気だったら誰しも変わるもんだろ。1250」

「そりゃそうだな。……そう言えば、ロイドとは会ったのか？ 1470ミラ」

「ああ、会ったよ、自治州に入った直後にな。1300」

「へえ、そうか。あいつあんま変わってねえよな。1460ミラ」

「……思っただけどよ、お前刻み方せこくね？」

「そうでもないと思うぞ」

「いや、せこいから」

ぶんぶんと頭を左右に振り、それはないと言い切る。  
ベーカリー、モルジュ。アルストは今、そこにいた。友人であるオスカーとレジ越しに語り合っている。先程から交わしている謎の数字。

「よし、1350！ これ以上はまけん！」

「~~~~~……よし、買おう！」

値引きであった。原価1500ミラのパンが結構な値下げ。しかも、焼きたてでもあった。満面の笑みで袋を手を持つアルストは、いや〜と頭の後ろをかきながらしんみりと言った。

「持つべき物は親友だねえ〜。ありがたやありがたや」

「その代わり今度なんか奢れよ」

「へっ？」

予想だにできなかった一言がオスカーの口から紡ぎ出された。

「この三年間、一人旅してたんだろ？ その時の土産話も含めて、なんか飯奢ってくれ」

「いや、あのー」

「そうだな、リクエストはスパゲッティ系かな」

「人の話をー」

「じゃ、楽しみにしているからな」

とても良い笑顔で、朗らかに言う彼の顔を見て、回避不可能だと悟った。一度諦めがつくと、今度は逆に心の中から燃え上がってくる物がある。

一度ため息をついたが、やがてニヤツと笑い、親指を立てた。

「いいぜ、何でも来い！ 作り上げてやる！！」

完璧に燃え上がった彼は、そう宣言して店を出た。

## 銀からの挑戦状（前書き）

原作の第2章あたりです。

ちなみに作者は、銀戦やIBC籠城戦で流れるBGMが好きです。

## 銀からの挑戦状

ー翌日。

テイオとランディは猜疑心まみれの視線を目の前の二人に向けていた。その人物。

ロイド・バニングスとエリイ・マグダエルである。

昨日までは落ち込んでいたエリイが、一夜にして復活。そして何故かロイドと和気藹々と話している。とは言え、二人の語らいはどう聞いてもそんなふうには全く聞こえないが。

要するに、会話の内容が大変残念なのだ。何が残念なのかはご想像にお任せしよう。

そんなふうに見られているとは露知らず、押し黙ったままの二人に気づき、首を傾げた。

「二人ともどうしたの？」

エリイのその問い掛けに、ランディが答えようとしたその時。

「ちよりーす！ 元気かお前ら！！」

突然支援課の扉が蹴り開けられ、昨日会ったアルストが現れた。機嫌が良いのか、大変ニコニコ顔である。

また、昨日のような旅人風の衣装ではなく、青い横幅に余裕があるズボンに赤いジャケットを着ていた。さらに言えば、頭に巻いていたバンダナが首もとに下がっていて、意外に長い金髪をあらわにしている。

が、まだ一つ、昨日より増えている物があった。それに四人は目を奪われ、どう突っ込めば良いのかわからなくなる。

「どうしたどうした？ そんなシケタ面して」

「…いや、それ見たらシケタ面したくなるんだが」

とりあえず、最年長だから、という理由ではなかるうが、洗面のラ  
ンデイが声に出した。

”ネコ耳”。それが彼の頭の上にあった。

いや、マジに。冗談ごとではなく。

彼以外の目線がそれに注がれる中、アルストはニコニコと、

「いや、みんなしてこっち見て。俺照れちゃうー」

「捜査を続けよう」

「…人の話は最後まで聞くもんだよロイド君!？」

こういうのに慣れているロイドは、彼の戯れ言を無視してため息を  
つく。が、軽くスルーされた事に対して抗議の声を上げる。

と、ここで何かに気づいたのか、アルストはティオの方に目を向け  
ー固まった。

「? ……どうしたんですか？」

「……………」

ポカーンと口を半開きにして、モゴモゴと何かを呟き、彼はそつと  
支援課の扉から外に出た。

「えっと、ティオ。アルはなんて言ってた？」

「はあ。それが、『被った』と」

被った……? ああ、ティオの頭にあるセンサーか。三人はそれを  
見て、合点がいった。ティオの方も何か思うところがあるのか、

「これはネコ耳ではありません」

と断固として言い張った。と、

「ちよりーす！ 元気かお前ら！！」

再び支援課の扉が開かれ、先程と同じような勢いとノリでアルが現れた。ほとんど変わっていないが、ネコ耳がイヌ耳になっている。

デジャブ、もしくはテイク2。彼の再登場はそんな感じである。――最初と同じく、全然受けていないが。

笑いがとれていないのに、それでもめげずにやるお人。ある意味、尊敬に値する。……私は全然そうは思わないが。

「じゃあ書くなよ作者！！」

……地の文に突っ込まんでください。

それはさておき、虚空に突っ込みを放つアルストを見て、若干引き気味の四人は愛想笑いを浮かべながら尋ねた。

「なにか、用があつて来たんだらう」

「へっ？ 用なんてない！……ごめんなさい嘘ですすみません」

バツと胸を張って答えるアルに対して、向けられた視線はあまりにも痛かった。絶対零度よりも遥かに冷たいそれを向けられ、アルストは頭を下げて謝る。

「まったく……」

「とんだ人騒がせです」

ランディとティオがあきれ顔で首を振る。流石にやばいと感じたの

か、アルストは、

「まあ、昨日見かけたときと比べると、ずいぶん明るくなったな」

と、イヌ耳を外し、首に巻いていたバンダナを額にまで持ち上げた。アルストのそれを聞いて、四人は疑問符を浮かべる。

「えっと、それどう言う」

「いや、昨日の夕方、お前らのこと街で見かけたんだよ。めちゃくちゃ元気がなさそうだな」

「あ……」

彼の指摘にエリイが小さく呟きを漏らす。すると、彼女はみんなの方を見て、頭を下げた。

「昨日はごめんなさい。どうかしてたわ」

「おう、気にすんな」

(別にあなたに言ったわけじゃないんだけど)

ふうつとため息をつく。そんな彼女を見ながらアルストは続けた。

「それで元気つけようと思った訳だが……いらなかったみたいだな」

そう言って、アルストは手に持ったままのイヌ耳をロイドに向かって放り投げ、彼はそれをキャッチした。

「? どうするんだ、これ」

「土産」

「いららないよ」

あきれ顔でため息をつく彼に、まあまあと言いつつ、手に持ったままの袋を「そごそとあさり始めた。

「お前らもなんかいる？ あと五つぐらいあるんだが」

「……ちなみに、何があるんですか？」

「うん。あとは……全部ケモノ耳シリーズ」

シリーズなのか。どうやらこのケモノ耳はシリーズだったらしい。一体何処で売っているんだろう。

困ったようにため息をつく四人を見て、アルストは眉根を潜めた。

「ため息ばかりしていると幸せが逃げるぞ」

「誰のせいだ、誰の」

ランディは疲れたような表情でそう告げた。

「ていうか、余り物を俺達に押しつけようってんじゃないだろうな？」

「……何を言う、そんな非情なことをするわけないだろう」

「今の間はなんだ、今の間は」

ランディが「もういい」と言っているあたり、とても疲れたのだろう、椅子にぐたつと座っている。

どうやらケモノ耳シリーズ、とても不評だったらしい。当然だが。このままでは残ってしまう。自分もつける気はないし、ネタになるだろうから買ったただけであって。うんちと悩んでいると、一つ、良いことを思いついた。

「なあロイド、これ付けてー」

「付けないぞ、俺は」

「もう丸わかりなのね……」

先程、ため息をすると幸せが逃げるぞ、と言った男がまさかのため息。ああ哀れ、ケモノ耳シリーズはゴミ箱行きなのか。

「いや、でもさ。これ付けると、喜ぶ人いるだろ？」

「例えば？」

「あ、う〜……そうだな……。……セシルさんとか！」

痛いところを突かれたが、頭の中にとあるお人が浮かび上がった。これは……いける！！

「はら、セシルさんってこう言うかわいい系好きだったろ？ これ付ければ、いつも以上にかわいがってもらえる……かもだぜ！」

ごめん、もらえるって言い切れない。

しかし、それを聞いてロイドはうっとうしく悩み出した。

お、揺れてる揺れてる。よし、チャンスだ！

みんな、たたみかけるぞ！！（え

と、そこへ。

「……………（じー）」

「……………（じー）」

「……………（弟貴族が！）」

しんみりとした、三つの視線。それをもろに受けて、ロイドはハッと我に返った。

「コ、コホン。とにかく、これいらぬから。アルも早く戻って」  
チリン

「？ 何だ？」

いきなり、支援課の奥の方にある大型の端末から、そんな音が鳴った。みんながそちらに行くのにつられてアルストも便乗。どうやら、導力メールなるものが届いていたらしい。

その辺には詳しくないアルストは、説明を受けてもただふくと疑問符を浮かべるだけだった。

「何が書いてあるんだ？」

「待つて下さい。今……」

テイオが端末を操作して、メールの中身を見る。そして、届いた文面。それを見て、”アルストを含めた五人”が驚きの声を上げた。

「な、これ……」

「銀<sup>イン</sup>から、だと……！？」

それは、銀と書いてインと読む、凶手からの挑戦状だった。

## あの時（前書き）

今回暗いです。とは言え全編ではないですが。

そして後半戦……疲れたんだろうな、若干手抜きです。ご了承ください。

## あの時

『ねえ、あなたはそこで何してるの？』

『別に……。ただ、ここにいただけ』

『でも……。何かつらいことがあったの？ 悲しそうな目をしているけど……』

なんで俺は、ここにいるんだろう？ わからない。わからないことだらけだ。

でも、何も考えなくても良い。”あそこ”から来る命令に従って、体に染みついた動きで”それ”を行うだけ。

何の変化もない、そんな世界。暗闇に包まれた、クソと汚物で出来ている道を、まっすぐに歩くだけ。

『つらい事なんて、ない。つまらないだけだよ』

そうだ。

つらいんじゃない。つまらないだけだ。

暗く、冷たく、おぞましい世界なんて。

つらいんじゃない。そう、いい聞かせようとする自分がいる。

『ふん。だったら、面白いことしてあげる！』

『は』

『ほら、行こう！』

『いや、俺は……』

『俺”なんて言わない。その年で言うと、ただのマセガキだよ』  
『……そう言う君はどうなんだよ』

俺と大した歳違わないのに、そういうことを言ってお前の方が、よっぽどマセガキだ。  
でも、なんで。

『名前、なんて言つの？』

『名前なんてない。捨て子だから』

『そうなんだ。じゃ、名前つけよっか！』

『何様のつもりだよ君……………』

何でこんなに。

『やめて……………、やめて！』

『……………』

何でこんなに！

『ア……………ス』

『……………』

こんな事、初めてじゃないのに！  
何でこんな！

「…ル？」

こんなにも…！

「ア……………おい……………アル、アル！」

こんなにも、つらいんだ…！

「アル！ おい、アルスト！！」  
「はっ！？」

揺さぶられ、耳元で自分の名前を叫ばれると、アルストの意識は覚  
醒し、一気に頭を持ち上げた。

瞬間――

「いたっ！」

「っ！」

頭と頭がごつつんこ 的なノリでロイドとアルストの頭部が接触。  
まあ、簡単に言うとはぶつかって訳だが。

頭を抱えてうずくまる二人。そして、何やってんだ、と言うような  
ため息が周りからこぼれる。

「うっ………よ、よう。話終わったのか？」

そちらに顔を向けると、何故か呆れた顔から心配そうな表情になる  
ロイドを除いた支援課の三人。首を捻りながらランディが声をかけ  
てきた。

「まあな。だけど大丈夫か、お前。顔が真っ青だが」

「ああ、大丈夫だ。………それより、俺寝てた？」

「ぐっすり眠ってました。それと、うなされてましたよ」

IBCビルの一階、そのソファにアルストは座っていたのだが。  
テイオの言うことを信じるならば自分でも知らないうちに眠ってし  
まったらしい。

ちなみに、彼らがIBCビルにいる理由だが、先程送られてきた銀  
からの挑戦状。それが、ここから送られた事がわかったのだ。

そのため、支援課のみんなは調査へ。民間人であるが自分はここで待機していたのだ。

「そうか……。それより、みんなの方は？　なんか掴めたか？」

「ええ、とりあえず、ハツカーの居場所を突き止めたからー」

「ハツカー」？」

首を横に振り、桁クソ悪い夢の残滓を追い出すと、事件について聞いてみた。すると、エリイの口から専門用語らしき単語が飛び出し、アルストは首を傾げた。

要するに、導力ネットを通じて、向こう側の端末を遠隔操作する技術らしい。途方もな、と思うのだが。

「ハツカーの居場所がわかったから、あとはジオフロントB区画に行くんだが……」

「付き合っぜ」

復活したロイドが、頭をさすりながらこの後の予定を言ってきた。すると、それにすかさずアルストは便乗する。

「いや、ダメだ。ジオフロントには魔獣がいる」

案の定、彼が止めようとしてきたが、

「安心しろって。俺が戦えるのってお前知ってるだろ。魔獣程度ならお手のモンだ」

それに、と彼は続ける。

「ここでおしまい、と言うのも、後味が悪いし」

そう言つと、ロイドはうーっと唸っていたが、やがてため息を一つ吐くと、

「わかった」

同行を許可してくれた。

~~~~~

ジオフロントB区画は、主に街の下水道的な役割を持っている。それ故、辺り一面水浸しのところも多く、足場が悪い。しかも、ところにより導力灯が切れかかっているのかチカチカと点滅している箇所があり、前には進みづらい。

そんな厄介な場所にも、魔獣が徘徊しており、B区画を一言で表すならば”めんどくさい”である。

「はあ……厄介そうな場所だな」

目の前を通り過ぎた魔獣に目をやり、アルストは腰に下げている二本の小さめの刀——小太刀を引き抜いた。

——ヒュヒュン——

「クラフト戦技、二連爪」

ぽつりと呟かれる言葉通り、二回の斬撃が爪の如く相手を切り裂く。切り裂かれた魔獣は、あっけなく潰えた。

「……早いです」

その光景を見たティオは、微かな驚きを浮かべて言った。

「ま、実戦経験はそれなりにあるしな。この程度なら余裕だよ、ティオっち」

「……ティオっち？」

あっけからんと笑いながら言うアルストに、ティオはうさんくさい目つきで彼を見やる。それには気にせず、アルストは残りの三人を見た。

「それほど手強い奴はいないみたいだ。このまま進もうぜ」

「そ、そうだな」

「油断せずに進もうや」

ロイド、ランデイが頷き返した。

その後、一行は目標地点の最後までたどり着いた。が、そこには難敵ともとれるものがある。

「なにこいつら？」

「多分清掃用の何かだろうけど……今は動きを止めよう」

「でしょうね。囲まれてしまったし……」

清掃用のロボット、おそらく暴走しているのだろう、まさに問答無用で襲いかかってくる。しかも、エリイの言うとおり正面に親玉タイプのそれが。周りには子機とでも呼べる小さいタイプが五人を囲むように並んでいた。

「みんな、一気に行くぞ！」

『了解！』

ロイドのかけ声、それと共に己の武器を構える。

まだまだ未熟なところがある特務支援課だが、この数ヶ月間で互いに信頼関係を築いてきたのだ。アルストはまだ知り合って一日だが、それでもはや馴染んできている。

はつきりと言う。ガラクタ共になど、遅れはとらない。

ロイド、ランディ、アルストによる打撃と斬撃。エリィ、ティオによる銃撃と導力魔法。それらによって瞬く間にガラクタ共を撃破した。

## あの時（後書き）

さて、もうそろそろ主人公の紹介でも書くか……。

いや、書こうと思ってます。しかし、次回かどうかはわかりません。  
なるかもしれないし、ならないかもしれない……。

その辺は……前書きと同じくご了承くださいw

いざ、星見の塔へ（前書き）

やばい…銀戦もすんでいないのにもう少しで発売だよ、碧。

発売したらクリアするまで休止状態になるしな……。

……せめて銀戦は終わらそう。（ハードル低っ！）

## いざ、星見の塔へ

「……あまりふざけた事言つと、お兄ちゃんお仕置きするぞ」

「へん、やれるものならやっ……って痛い痛い！ ゴメンナサイゴメンナサイ！！」

第八制御にいた13歳のヨナに頭グリグリをかます18歳のアルスト。

とても大人げないが、こればかりは仕方がない。

「いや、仕方ないから。アル、もうその辺で……」

「言え！ 言うか！？」

「い、言う言う言う……！」

「ルンかよ……」

ヨナに固め技をかませ、狙ってやってんのか、と言いたくなるほどあるシーンを連想させるやり取りに、ランディは呆れた表情でため息をついた。ちなみにここはカリオ トロではない。

「何で君は支援課にあのメールを送って来たんだ？」

「言う、言うから放してくれよ！」

ヨナの叫び通り、アルストは彼を放してやる。と、彼はううっと呻きながら一枚のカードを渡してきた。

「お前体固いな」

「しるわさ」

ぼそつと呟いたアルストの一言に、しっかり口出ししてから彼はモニターの前に座った。

「いたた……。……銀殿からの依頼でね。ここに来た奴にそれを渡せとさ」

「つまり私達のことですか」

テイオが納得したように頷きながら言った。それにヨナは「ああそっうだよ！」といきり立つ。

どうやら彼はテイオの事が苦手らしい。アルストがグリグリをかます前に、彼女のことを聞いたことを厄介そうにしていたし。

「それでロイド、何が書いてあるの？」

「ああ」

ヨナから渡されたカードを読んでいたのか、思案顔の彼にエリイが聞いて来た。するとロイドは、そのカードを皆に見せた。

「これは……？」

内容を読み、首を傾げる一同。どうやら”星見”と言う所で待っているようだ……。。

「どこだよそこは……」

「ーと言うわけである。

待っていると言われても、そこがどこだかわからなければ意味はない。

「……もしかして、星見の塔こと？」

『あ』

あつた。そしてわかつた。

エリイの言葉に、残りの三人はそろって声を上げた。

「ふん、やっと行つたかよ」

先程から一転、静かになつた部屋に一人ポツンと取り残されたヨナ。クルツと椅子を回してモニターに目をやった。その表情に少しばかり寂しそうな影が――

「さしてねえよ馬鹿野郎！」

……お前も地の文に突っ込むな。

ため息をつき、何となくピザが置かれているテーブルに目をやり、

「何だ、あれ……？」

何故かテーブルに、獣耳シリーズ一式が置いてあつた。

~~~~~

「アル、一体何を置いてきたんだ？」

「企業秘密だな」

ジオフロントB区画を出て早々、ロイドはそう尋ねた。  
しかし、返ってきた返事にドツと脱力。そのまま尋ねることを諦めた。

彼がそう誤魔化すときはテコでも話さないとわかりきっているからだ。だが、それは同時に信頼の証でもある。

そんな関係を感じ取ったのか、ティオは珍しそうに、

「ロイドさん、ずいぶんとアルさんの事をわかっているみたいですね」

と言った。

「ああ、アルとの付き合いは長いからな。腐れ縁みたいな感じだよ」

「腐れ縁ねえ。八年、いや、三年間会っていなかったから差し引き五年か。そのぐらいで腐れ縁になるか？」

ロイドの言葉に愛想笑いを浮かべながらアルストは言い、皆の顔を見てさらに続けた。

「俺色々あって十歳からコイツン家に厄介になってたんだよ」

ティオはその言葉を聞き、昔聞いたある話しを思い出した。

『前にも言ったが、俺には弟と弟分がいる。と言っても、今じゃすっかり馴染んで弟分は完全に弟になっちまったがな』

今でも覚えているあの人の言葉。その弟達のことを嬉しそうに話していた。

(じゃあアルさんが……)

「ふむ、確かにそれは腐れ縁になるな」

「そうね。でも大事なのは年数じゃなくて中身だと思う」

ランディが、そしてエリイがウンウンと頷きながらそう答え、それを聞きアルストはどこことなく嬉しそうに言った。

「なるほど、確かにその通りだ」

彼もウンウン頷きながら言い、彼は朗らかな笑みを浮かべた。

「ところでロイド君。話しは変わるが、君はあの人に思いを伝えたのかね？」

「なっ……!？」

ギクツとした表情で一步彼は後退りした。そんな彼を見て、アルストはなおも笑みを崩さずままだに問い掛けた。

「ほほう、何が『なっ……!？』なのかね？」

「い、いやそれは」

「いや、ロイドも男だなあ」

腕を組んだランディがズイツと彼に近づき、

「で、誰なんだ、その人は？」

と、小声で語りかけた。

この状況下、ロイドは周りを見渡して味方になってくれるような人物を探す。まず、ランディは除外。この状況を作り出した本人であるアルストも同様だ。

テイオは何故か我関せず、と言うようにあらぬ方向を見ているし、エリイはこちらを睨んでいる。  
結果、孤立無援。

「い、言えるわけないだろう！ だいたいアルも嘘吹き込むな！」「嘘じゃないと思うんだがな……。ま、こっからは真面目な話し」

笑顔が消え、代わりにその顔に真剣な表情でそう言うと、彼はランディを押しつけて彼の耳を引き寄せる。

(断られることは目に見えているけどよ、ホント、ちゃんと伝えたいほうがいいぜ。後悔しないためにも)

(…わかつちやいるんだけどさ……)

はあとため息をつく彼に、アルストは背中を叩いてやった。

「ま、あんまり落ち込むな。いざとなったら、お兄さんがフォローしてやるぜ」

「おいそこ、俺のセリフだぞ」

何のことだかわかりません。

男同士で話しあっていたからか、女性陣はこちらをジト目で見つめていた。

「まったく……これから急がなきゃならないときに、何をやっているのかしら」

「ええ、まったくです」

『……………ごめんなさい』

ぶつぶつ呟かれる文句と彼女らの表情に、男衆三人はそろって頭を

下げた。

「急ごう、時間を取られた」

『誰のせいだ!』

「……………ホントにごめんなさい」

まるで自分は関係ないとかばかりに言い放ったアルストに、全員からそう怒鳴られた。アル、口には気をつけよう。

## 星見の塔（前書き）

いや、根性でやりました、連続投稿。

何とか発売まで、もしくは発売日には銀戦が終わる兆しが見えてきました！

## 星見の塔

目の前に広がるいかにも重たそうな扉を、ロイドとランディの二人がかりで何とか押し開ける。ギギイ〜と嫌な音が鳴る中、アルストは隣にいる警備隊の隊員であるノエル曹長と会話をしていた。

「だーかーらー、俺は大丈夫だつつうのっ。それなりに戦闘は出来るし、経験もある。危険になんかならねえよ」

「そうは言っても、遊撃士でもない市民を戦わせるなんて出来ません。ここで待っていて下さい」

会話というか、注意というか。とにかく、ノエルがアルストにここで待っていてくれと頼んでいるのだ。

何故警備隊である彼女がいるのかというと、ちょうどここに巡回警備で通りかかったときに壊れたバリケートを発見したためだ。その後特務支援課がちょうど良いタイミングで来て、事情を話したというわけだ。そして自分から皆さんに協力すると言って付いてくるようでもあった。

だが、アルストが付いてくることには未だ反対していたが。彼女の言い分もわからないことはない。遊撃士でもない彼を戦わせるなど、警備隊としては見過ごせないのだろう。

「ぬっ……」

「むっ……」

二人して見つめ合い一程なくして扉を開けていた二人が戻ってきた。

「おーい、開けたぜ……って何してんだ二人とも？」

「いえ……ランディ先輩、いいんですか？ 民間人を伝説の凶手が待っている塔の中に入れて」

「ああ、アルだったら大丈夫だろ。見たところ、結構な使い手みたいだからな」

そうでしょうか、と首を傾げるノエルを見て、アルストはため息をついた。

（結構な使い手ね……あまりそう見られたくはないんだが）

まあ、見られてしまったものはしょうがない。アルストはずり落ちてきているバンダナを手で持ち上げて、

「ランディもこう言ってんだから大丈夫だって。心配性だなお前さん」

「……わかりました。そこまで言うなら」

「よし、んじゃ中入ろうぜ」

そう言って塔の方に足を踏み入れたが、すぐに彼は固まり顔をしかめた。

（なんだ？ この違和感は……？）

首を傾げたが、すぐにハツと我に返り、ややみんなと遅れていることに気がつく。彼は慌てて皆に追いつこうと足を早めた。

~~~~~

星見の塔内部。そこは一見綺麗な場所に見えた。

「あの光りは…蛍？」

「そうみたいです。ここはずいぶん放置されているようなんです。ホントはきちんとした調査をしたほうが良いんですけど……」

「ま、あのことなかれ主義の司令のことだ。予算の削減とかで許しちゃくれねえだろう」

……なんちゅう放任主義の司令だ。ランディの言葉にアルストはそう思い、ノエルもそう思っているのかふう〜とため息をついた。

「そうなんです。先輩、よくあんな司令の元で働いていましたね」

「ははは、だから俺も警察にいるんじゃないか」

「ああ、なるほど」

どうもその司令とやらは全く持つて上司と見られていないようだ。身内でさえ文句を言いまくっている。だが、そんなことよりアルストは――正確には彼とティオの二人は、この塔に並々ならぬ何かを感じ取っていた。押し黙ったままの二人を見て、ロイドは声をかけた。

「ティオ、アル。どうした？」

「いや……なんか変な感じがする」

「アルさんもですか」

アルストの呟きを聞いたのか、隣にいたティオが無表情にそう答えた。皆の視線が集まる中、ティオが先程から感じていることを口に出した。

この塔の中の法則がねじ曲げられていて、オーバルアーツの効き方が違うと言うこと。要するに、土・火・水・風の四つに加え、時・空・幻の属性が加わった。首を傾げる一同に、アルストは少し考えながら答えた。

「火に弱い魔獣がいても、その上位三属性に弱い魔獣はいなかったな。つまり、その法則が曲がって、三属性に弱い魔獣がいるって言うことか？」

「多分そうだと思います。ていうか、アルさんも感じ取ったのではないのですか？」

最後はジト目で彼を見つめながらそう言い、アルストの方は頭をポリポリとかいた。

「いや、俺はあくまで”変な感じがする”っていう程度だから。どちらかというと……」

そう言うやいなや、小太刀を引き抜き真っ正面に構える。一同がその行動を見守る中、アルストは、

「実体の放つ気配を読む方が得意かな……。構えろ、来るぞ」

多少含み笑いを浮かべて言い、すぐに真剣な表情を浮かべて皆に促した。

それはすぐに来た。

「な、何アレ!？」

「中世の錬金術師が作り出したオーバマペット!？」

機械人形——それが一番しっくり来る呼称か。全体が人の二、三倍あり、足が短く胴体と腕が太く大きくなっている。全身を鎧で覆ったような、そんなのが二体ほど。

「確認は後回しだ、来るぞ!！」

ランディの叫び声と共にそれぞれが武器を構えた。  
オーバマペットがその巨大な腕を生かした突っ張りを近くにいたアルストにたたき込もうとする。

「！ 危ない！」

「アル！？」

ノエルとエリーの叫び声。それを聞いてもなお彼は何もせずただ黙ってその場に突っ立っていた。危険だと感じ、彼を助けようと賭だそうとしたとき、

「大丈夫だ…… そっちはそっちの心配をしている」

いつもと似合わず、すこしばかり低くなった声音でそう言った。しかし、そう言われても全然大丈夫そうには見えない。でも、と叫び出しそうになったが、それは彼が取った行動によって出せなくなった。

急に小太刀を、二つとも上空に放り投げた。

自ら武器を捨て、驚いた二人はさらに驚くこととなる。

彼はオーバマペットの突っ張りを僅かな動きで避け、突っ張った腕と、胴体を開いた両手で掴んだ。そしてそのまま――

「おらぁー！！」

背負い投げの要領で地面に叩きつけた。

ドドーンとすさまじい音が鳴り響き、大地が激震する。

「なっ……！！？」

「！！？」

「おいおいおい!？」

ロイドとティオ、ランディも、急になった音に驚いたのか、もう一体のオーバマペットから距離を取り、その光景を見て驚嘆の声を出した。

無理もない。彼が投げたのは、一見、数十、もしくは数百キロに達する大型の人形なのだ。それが意図もたやすく投げられたのを見たら、誰だって驚くだろう。

「余所見すんな、そつちはそつちでやれ！」

彼の叫びにハッと我に返り、彼が相手しているオーバマペットから目を離れた。

地面に叩きつけられた人形は、立ち上がろうともがくが、その前にアルストが動く。上空に投げた小太刀を見事手に戻すと、そのまま左右に突きだした。

「周円斬」

一見、構えたまま回転し、相手を斬るといふ単純な技だが、生憎、斬ることは出来ない。

彼の小太刀、両方とも刃がないのだ。それではどんな名刀でも斬れない。しかし、それで良いのだ。この技の目的は衝撃波をたたき込むのであって斬ることではない。

衝撃波をもろに受け、人形の鎧がベコツとへこむ。すると――

ギギ……ギ

機械人形の内部にある歯車が歪んだか、人形の動きがとてもぎこちないものになった。耳障りな音を出してなおもがく人形の動きを、

アルストは目の前で小太刀を十字に重ね合わせ、そのまま振り切る。

「交飛斬」

周円斬同様、こちらも衝撃波を飛ばす技である。ただし、こちらは飛ばす衝撃波が十字型をしている。十字型の衝撃波は先程と同様にまっすぐ進み、機械人形の鎧をへこませた。今度は内部の歯車だろうか、そんな物をまき散らしー

「……………」

異質なオーラを上げてそのまま忽然と姿を消した。

眉を寄せ、事態の理解が出来ないという風に顔をしかめるアルストは、後ろの方から悲鳴が聞こえ、思わずそちらの方へ目を向ける。

「き、消えた!？」

「そっちもか……………」

同じように消えていった人形を見て、アルストは首を傾げた。

(どうやらここは、色々とおかしな事になっていそうだ)

それを見ながら、アルストはそう思った。

~~~~~

「アル、大丈夫か？」

「ああ、大丈夫だ。そっちは？」

「ていうかお前、一人で倒したのか。…………さっきもアレを投げ飛ばすしよ…………。何もんだお前」

ロイドが彼の安否を確かめ、ランディがそう言いながら近づいてくる。まあ、彼の言い分はわかる訳だが。

確かに、自分の体でアレを投げ飛ばせるとはとうてい思えない。他のみんなも同感の用で、それを聞いたそうな顔をしている。なのでネタばらしと、

「俺はただたんの旅人……これ前にも言ったな。まあいい。俺がやったのは”合気道”という奴だ」

「合気道？ 確か、護身術の一つだったと……」

「テイオっち正解。相手の気を利用する、筋力を使わない護身術だ」

ビツとテイオの方を指さして言ったが、皆あまりわからないのか首を傾げた。うーんと唸りながら、

「もしかして、気を利用するっていう表現がわからない？」

「ああ、ちよっと想像しにくいよ。つまり、相手の動作の流れというか勢いというか……そんな物を使う、てことか」

「ロイドっち正解！」

流石は捜査官。よくあれだけの言葉で理解できたのもだ。今度は両手でビツとおちゃらけた感じで指さしたが、

「……うざいからやめてくれないか？」

「すみません……」

即座に頭を下げる。そんな二人のやりとりを見て、周りから笑いが上がった。

「ふふ、ずいぶん仲が良いのね」

「なんかお前ら二人がそろつと、コントみたいになるな」

「全然笑い取れてないだろ。……そう言えば、オーバルアーツの効き方はどうだった？」

アルストがため息をついて言い、途中で思い出したようにそう呟いた。

「あ、はい。確かに、いつもとは効き方が違いました。特に、上位三属性は」

「……どうやらティオの見立ては正しいみたいだな」

「はい」

ノエルの感想というか、そういうのを聞き、ロイドは考え込んだ。

「……とにかく、用心しながら先に進むしかなさそうだな」

「ええ、そうですね。私も、個人的に調べてみたくなりました」

こうして、塔の探索が始まった。

## 銀との戦い（前書き）

よっしゃあ、行った通り銀戦書き終えたぜ！

そして何気に天剣が書いた物では一番長い！ まあそれでも五千字程度なんですが……。

## 銀との戦い

思っていた以上に厄介な場所である。この星見の塔にかかっている新たな法則、上位三属性。

戦闘時、オーバルアーツを主体としているテイオヤ、得意としているエリイは四苦八苦している。余談だが、アルストはアーツが苦手だ。オーブメント構成も、三つのスロットのラインが三つのみ。属性固定スロットがないぶんまだマシと言うものだ。

「ねえロイド、アルって昔からあんなに強かったの？」

道中エリイは、先程から気になっていた事をロイドに聞いてみた。彼はああと頷き、

「昔っから腕っ節は強かったな。兄貴も驚いてたよ」

「俺はお前に口で勝った覚えがないからな。そっちでなんとかするしかないんだよ」

なんとまあ、二人の上下関係（部分部分による）がよくわかる会話である。アルストは苦虫を潰したような、文字通り苦々しい顔でそう言っていた。

その後、襲いかかってくる魔獣ーいや、魔物の方が正しいか。を、蹴散らし、一同はそのまま塔の最上階へ上がっていった。

「ようやく終点か」

これまでで一番大きな広間に出て、アルストは周りを見渡しながらそう呟いた。

巨大な本棚、青く光る天球儀。それらのものが置かれている部屋は

がらんとして人の気配は皆無だった。——と、彼らは思っていただろう。声をかけられる前までは。

「フフ……。古の錬金術師どもが造った夢の跡といったところか」  
「っ!？」

声をかけられ、ロイド達はそちらを振り返った。

「お前は……！」

「黒装束に仮面……！」

「出やがったな……！」

ロイド達から聞いた通り、本棚の上に例の”銀”<sup>イ</sup>がいた。

「初めまして、特務支援課の諸君。どうやら余計な者が二人、紛れ込んでいるようだ」

「……自分はただのサポートです。気にしないで下さい」

「まあ黒子かなんかだと思ってさ」

ノエルに続き、アルストがそう軽く言うが、内心では舌を巻いていた。

(聞いていたとおり、かよ。厄介極まりないな)

何処で聞いたのかはわからないが、相手から感じる威圧感間違いなく本物である。

「フ……まあいいだろう」

そう言っと、すばらしく軽い身のこなしで本棚からすたと降りて

くる。一同と対面する中、礼儀のつもりなのか銀は名乗りを上げた。

「お初にお目にかかるー銀という者だ。まずはここまで足労賜ったことを労おう」

「……ああ、随分と引きずり回してくれたもんだな。ちなみに、塔にいる奇妙な魔獣はあんたが用意したもののなか？」

「フフ……あれは元からこの塔の中に徘徊していた。腕を鈍らせな  
いよう、齒ごたえのある狩り場を探してこの塔を見つけたのだが。  
中々どうして、面白い場所だ」

銀の言葉に、思わず眉をひそめるアルスト。何かがおかしい。それが何なのかはわからないが、ひどく腑に落ちない気分になった。背後にいるためそれには気づかないロイドは、

「……あんたの仕業じゃないのか」

と多少当てが外れたような顔をした。

「まあ、個人がどうこうできるものでもありませんし」

「確かに。それより銀、一つ聞きたい」

「ほづ……」

アルストは銀の目ー仮面によって隠されてはいるが、目のあたりをじっと見つめ、

「さつき、あの魔獣ーいや、魔物は元から塔の中に徘徊していた  
と言っていたな。あれは、お前が来たときからなっていたと言っ  
とでいいのか？」

「その通りだ」

銀の言葉を聞いて、アルストは目を閉じる。

「……アル、どう言うことだ？」

「……いや、ただ気になったんでな」

ロイドの問いかけにそう答える。それに、”今”は関係ないだろうしーその言葉は飲み込み、アルストは閉じていた目を開いた。

「さて、色々疑問はあるだろうが……ーまずはその前に、最後の試しをさせてもらおう」

……どうやらこれ以上言葉を費やす気はないらしい。銀が大剣を構えるのを見て、良いタイミングで質問できたぜ、と苦笑いを浮かべかけたが、すぐに引つ込めた。

「どう言うつもり!？」

「弱者には興味はない。お前達が、我が望みに適う強さを持っているか……その身で証明してもらおうぞ」

エリイの疑問にそう答え、一同はこの戦いが避けられないことを悟った。

「やっぱりお約束ですか……」

「めんどくさそうに言うなって……」

テイオの呟きにアルストはため息と共にそう答える。

「へつ多勢に無勢と言いたところだが……気をつける! コイツ、すさまじく強いぞ!」

「どうやら手加減する必要はなさそうですね……!」

「ええ、全力で行きましょう！」

ランディ、ノエル、エリイが各の武器を構え、それにならないロイド、テイオ、アルストの三人も構えた。

「フ……良い闘志だ。――それでは行くぞ！」

しんみりとした声音で言い、しかしすぐに銀はロイド達に突っ込んでいった。

~~~~~

「はあっ！」

銀が大剣を横薙ぎに叩きつけ、それを避けようと先頭にいたロイドは後ろに飛び退く。が、それはフェイントであった。

「逃がさん……」

突如左手を飛び退いたロイドに向け、そこから先端にかぎ爪の付いた鎖を飛ばし、それが彼の右腕に絡みつく。

「な……つて、うあ!?!」

鎖を引き寄せ、その動きに合わせてロイドは銀に引き寄せられる。気づけばロイドは今、銀の間合いに入っていた。

「ロイドっ！」

「まっずっ……」

大剣を再度振りかぶり、銀はそのまま振り切るうとする。しかし、ランデイが頭上から、

「どっしやあ！」

振りかぶったハルバードを着地と同時に地面に叩きつけ、その時に発生した衝撃波が鎖を破壊しロイドを解放する。それどころか、その一撃は銀さえも狙っていたのか、彼は手に持つ大剣でその衝撃を防いでいた。

「ランデイ、すまない」

「気にすんな。しかし、二段構えとは……」

そう言いながらハルバードをぶんつと一回転させる。普段の彼に似合わず、凄惨な笑みを浮かべた。

「中々味なまねするじゃないか」

「フ……貴様の方もだ。しかし……」

そう言うなり、大剣を盾のように構え、次の瞬間、構えた剣の剣腹に複数の銃弾が当たった。そちらの方を見ると、エリイとノエルが銃を構えている。仮面のせいかわかりづらいが、おそらく鬱陶しそうな目で彼女達を見ていることだろう。

「一人で相手を出来ないこともないがーいふむ、使うとするか」

そう言うと銀は一回転し、その途中で何か札のような物を二枚ほど投げた。思わず目を細める中、急に空気が揺らぎ、さらに二人の銀が現れた。

「なっ……!?!」  
「おいおいおい!?!」

元からいた銀も含め、三人になつた彼は同時に襲いかかつてきた。その標的となつたのは、エリイとノエル。

「行きます!」  
「やああ!」

二人ともそれぞれ銃弾を放つが、増えた銀は三人ともたやすくその弾幕をくぐり抜けた。

「終われ……」

彼らはぽつりと眩き、それぞれが大剣を、かぎ爪を、札を、振るい、伸ばし、投げつける。それらの攻撃に思わず終わったと目をつぶり諦めかける。しかし、空の女神は彼女らを見捨てなかつた。

「アイシクルエッジ!」  
「周円斬!」

氷の刃と小太刀による衝撃波がそれらを全てはじき返す。テイオとアルストがそれぞれアーツと技を放ち、二人をぎりぎりで助ける。

「テイオちゃん、アル!」  
「助かりました……! つてアルストさん!?!」

ホッと息を吐きながら答える二人に、テイオはどーもと頭を下げますが、アルストは構わず相手に突っ込む。ノエルが思わず止めようとするが、それすら構わない。

「フ……何をするかと思えば」

三人のうち一人の銀がため息と共にそう答え、アルストに大剣を上段から振るう。振るわれた大剣を片手の小太刀で受け止め――すぐに手首の力のある程度抜く。

――シューイン――

軽やかな音を立て、小太刀の刃の上――彼の使う小太刀には刃はないが――を、大剣が滑り、その軌跡を変えた。

「！ 何！？」

銀が驚きの声を上げ、その結末を見やった。軌跡を変えられた大剣はアルストの足下僅か数センチ外れたところを削っていた。

そして、その銀はハツとする。彼が、自分の間合いの内にいることを。

防御しようとしても、大剣を引き戻すよりも早く彼の小太刀が銀を貫くだろう。実際、大剣を滑らした方とは逆の小太刀の切っ先が銀の方を向いていた。

「終わりなのは、お前の方だ！」

そう叫ぶと、アルストは小太刀をその銀に突き刺した。小太刀は銀の体を貫通し――体が薄くなって消えていく。

（偽物……！）

ハツと我に返り、前を向くと残る二人の銀がアルストに札を投げよ

うとしていた。

「爆雷符！」

「それ危険だろ！？ 二枚も投げんな！」

直感的にそれが危険な物だと判断して、彼は苦情を述べながら化け物じみた動きでそれを避ける。二枚の爆雷符は、地面に突き刺さり爆発。そこを削り取った。

「避けたか……」

「当たり前だ！」

ちなみに、原作では戦闘不能（即死）90%である。避けた彼の判断はとても正しい。と、そこで銀は背後から気配を感じ取り、

「せいっ！」

「ふんっ！」

ロイドとランディが、トンファーとハルバードを振るい銀を一人ずつ狙い、銀は振り返りそれぞれが大剣に持ち替えて迎撃する。背後を向いた銀に、アルストはチャンスとばかりに再び突っ込むが、ランディが相手していた方の銀が急に飛び上がった。

「！ こんにゃろ！」

その動きに合わせてハルバードを横薙ぎに振るうが間に合わない。もとよりハルバードが重いのだ。従って、振るうスピードはどうしても落ちてしまう。

そして、取り逃がしたのは決定的なミスだったかもしれない。

『我が舞は夢幻……去り逝く者への手向け……』

そう言うなり、空中で銀は複数の鎖を四方八方まき散らす。

「っ！ まずっ！」

危険を感じ取り、アルストはその場で小太刀を構えたまま一回転。つまり、周円斬を放つ。放たれた衝撃波によって仲間達が後ろに吹き飛んだ。

「きゃ……！」

「うあ……！」

「お前、何を……！」

衝撃波によつて分身は消え去り、仲間達は後ろに吹き飛ばされ、体勢を崩したが、起き上がり、何があったのか確認すると、そろって声をなくした。

アルストは、銀が放った鎖によつて拘束されている。

「やばいやばいやばい……！」

冷や汗などをつうくとたらし、情けない表情でそんなことを口走る彼を見て、一同はため息をつきたい気分になった。身を挺して助けたのに、それじゃかつこ悪いだろ、と。

しかし、彼が危険な状態なのは変わりない。銀は拘束されているアルストに向かって、大剣を構えたまま一直線に向かってきている。

「フ……身を挺して仲間を助ける……か。いい心構えだな」

「褒めるぐらいだったらそこで止まれ！」

アルスト、本気の叫び。いくら銀の持つ大剣の先が丸みを帯びていようとも、十分斬ることは可能だろう。

「……エリイ、ティオ、手を貸してくれ！」

「わかったわ！」

「承知しました……！」

「ランディとノエル曹長は鎖を壊してくれ！」

「イエス・サー！」

「わかりました！」

状況を見渡し、素早く考えをまとめたロイドは、メンバーに指示を出す。

ティオはアーツを放つため、エニグマを駆動させる。ロイドはそのまま前に飛び出し、アルストの眼前——つまり銀から真つ正面に降り立つ。

「て、お前危ないだろ！……まさかお前、俺と心中するつもりか」

「そんな訳ないだろ！」

このメンバー、諦めが良すぎないか？

アルストのぼけに突っ込み、ロイドはそのままトンファーに電気を纏わせる。

「行くぞ、エリイ！」

「ええ、任せて！」

電気を纏ったトンファーを前に突き出し、そこへエリイの放った強烈な一撃が加わり——トンファーに纏った電気が巨大化、十分な威力を持ったそれで、銀の一撃を迎え撃つ。

『スターブラスト!!』

雷と大剣が真つ向からぶち当たり、数秒間そのまま拮抗する。しかし、やがて両者の攻撃が共に弾かれた。

「くっ……」

銀がうめきながら数歩後ずさるが、それはすぐに出来なくなる。

「なに……!？」

急に足が動かなくなつたーと言うか、足を捕まれた感触がして、彼はそれに目を向ける。すると、なにやら手のような物が銀の足を掴んで離さない。

「アーツ、カラミティクロウ」

ティオがぼつりと呟いた言葉。そのアーツは相手の速さと移動を奪うアーツ。つまり、彼は動くことは出来るが、その範囲が限定されるのだ。

「くっ……」

彼は呻き、懐に手を伸ばして一枚の札を取り出した。それを、術者であるティオに投げようとしてー!。

ーガシャナーー

何か壊れる音が響いた。銀が驚いてそちらを向くと、アルストが鎖の拘束から逃れたところだった。

「サンキュ、助かったぜ」

「ま、こちらもお前さんには助けられたからな」

ランディが肩をすくめ、ノエルも無言で頷く。それを見て、アルストはふっと笑った。

「アル。アレ、行けるか？」

「アレ？ てーとー……あれか。ああ、多分」

一瞬思案顔になったが、すぐにわかったのが、アルストはニツと笑った。

「行くぜ、親友」

「ああ、行くぞ！」

そう言うやいなや、二人は一気にかげだし、それぞれの得物を構えた。

『獣王——双虎撃——！』

二人の放つオーラが、虎を型どり、銀を喰らわんと突撃し、彼を飲み込んだ。

## 銀との戦い（後書き）

ちなみに、最後で放ったコンビクラフト。

比翼双龍撃……でしたっけ？ あれと似ていますが、わざとですw

その後（前書き）

やったぜ、碧の軌跡クリア！

しかし、アリアンさん強すぎだろ……。しかもラスボスひでえ……

## その後

ロイドとアルストのコンビネーションにより、銀に膝を付かせることが出来た。しかし、彼はそれを機に一つも動かなくなった。それこそ、糸が切れた人形のように。

(…………?)

その様子に、思わず眉をひそめるアルストだが、驚いたのはそこからだった。突然、銀の姿が消えのた。フツと姿が揺らいだかと思つたら、一枚の札を残してそのまま溶けてしまった。

「な…………!?!」

あまりの突然さと出来事に、声を上げる一同。無理もない、先程まで戦っていた相手が、突如として消えてしまったのだから。しかし、ランディとアルストだけはあまり驚かなかつた。どこか、そうなるのを感じ取っていた。少なくとも、アルストはそうであつた。

『そちらの二人はなかなか出来るようだな』

そして再び、銀の音が響く。

それと同時に、消えた銀とは離れたところから、もう一人の”銀”が現れた。

「い、いつの間に…………!?!」

「き、気づかなかつた…………」

「戦闘中に分身だけ残してそこで高見の見物つてわけか。恐ろしく腕が立つようだ……あまりいい趣味とは言えねえな」

エリイ、ノエルが呆然として呟き、ランディが忌々しそうに顔をゆがめる。彼の意見には全面的に賛成である。

「言うつかあれ、分身だったのか……。こちらほぼ全開だったのにアルストはそう内心で毒づき、小太刀を構える。」

「ふふ……気に障ったのなら謝罪しよう。しかし戦闘中に私の動きを見切れるとは。なかなか大した動体視力だ」

「ま、これでも実戦経験はそれなりに積んでるんでね。それで……まだ、やんのか？」

「ふ……まあ、いいだろう」

銀はそう言うなり手に持つ大剣を納め、それにならないロイド達もそれぞれ武器を納める。

若干険悪な雰囲気だが、相手にはもう事を構える気はないらしい。どうやらここから先は、答え合わせ、と言うことになりそうだ。

一人そう頷き、アルストは彼らの会話に耳を傾けた。

~~~~~

銀との問答でわかったことは大きく分けて二つ。

一つはアルカンシエルの大スター、イリア・プラティエに脅迫状を送ったのは彼じゃないこと。つまり、”銀”の名を語った他の誰か、と言うことになる。

そして、もう一つ。こちらは彼の依頼だが——その銀の名を語る者

の企みを阻止してほしい、と云うこと。

まさか犯罪者からの依頼を受けるとは……支援課というのはここま  
で仕事の幅が広いのだろうか。そう云う意味では、遊撃士よりもで  
かい。まあ今回は例外中の例外だろうが。

あの後、銀は塔の屋上に上がっていき、メンバーがそこにたどり着  
いてもすでに姿はなかった。テイオに頼んで周辺をサーチしたが、  
なんと彼はそのまま飛び降りたらしい。なんとまあ、ふざけた身体  
だ。

結局、捕まえることは出来なかったが有力な情報——何者かの企み  
が巻き起こっていると。それだけは確かになった。

ノエルの車で（厳密には彼女のではないが）支援課ビルに戻った後、  
アルカンシエルと連絡を取り色々と準備に追われ、アルストもめで  
たく放免となった。

いや、別に彼が何かしたわけではないが。とにかく、民間人に警察  
の仕事を任せるわけにも行かないため、そういう感じでビルから追  
い出された。

「お前らひでえよ！ 俺だけ仲間はずれか！？ しまいにはビルの  
屋上から飛び降り自殺してやる！！」

と云う彼の言葉にロイドは全く取り合わず、

「飛び降り自殺は後始末が大変だから、別の物にしてくれ」

と冷たく言い放った。

会話のあまりの内容に、苦笑いを浮かべる支援課のメンバーと、「  
うああああ……！」と泣き叫びながらビルを出て行ったアルスト。  
かなりシニールであったと記載しておこう。

~~~~~

――数日後――

前いたバニングス家にはもう別の住人が入ってしまったため、セシルさんのお宅にアルストはご厄介になっていた。

”働かざる者食うべからず”が信条のアルストは、セシルさんの母親――おばさんと共に家の手伝いをしていた。

主に食事や洗濯と言った家事等の手伝いだが。それでも大変喜ばれている。うんうん、嬉かな嬉かな。しかし、食費については出そうかなと思っただがやんわりと断られてしまった。むう……なんか申し訳ないな。

「あれ？」

ふと目に入ったのは今日の朝刊。そしてそこには速報と書かれていた。

「ふむ、何々……市長暗殺………暗殺!!?」

バツと新聞を広げ中身を確認していく。

アルカンシエルのブレ公演当日。市長の秘書であるアーネスト・ライズが持ち込んでいた短剣と拳銃で市長を暗殺しかけたらしい。捜査一課の捜査網を混乱させたが、独自の捜査をしていた特務支援課に取り押さえられた、ということ。

「へえ……。やったね、日陰者だとか叩かれていたのに」

とニヤニヤ笑いながら呟いた。

銀の名を語ったのも、そのアーネストと言う奴だろうか。その辺はあとで確かめに行こう。

しかし――

(銀、か……)

不思議と、塔で彼が言った言葉がよみがえってきた。

『そちらの二人はなかなか出来るようだな』

一人、というのはおそらくランディだろう。今思えば彼、塔に入る前に俺がそれなりに出来そうなることを見抜いていたし。だが、もう一人は――

(俺自身……だろうな……)

新聞を置き、アルストは何となく手のひらを開いて見やった。

(表面的な強さか……あるいは”中身”か……)

あいつが見抜いたのはどちらだろうか。

その疑問は、再び会う日まではわからずじまいだろう。彼はそっと拳を握りしめた。

## その後（後書き）

第二章終了です

記念祭か……飛ばし飛ばしだろうな……

基本的にはストーリー一直線なんです。他の支援要請は、まあ、気に入った物だけ番外編とするつもりです。（シュリとの出会いなど）

番外編 狭間の物語（前書き）

……ども、天剣です。

……皆さん、風邪には十分ご注意ください。

ちなみに今回、タグ道り”ロイドさんマジいい加減に”てきな物が入っております。さすが攻略王！

## 番外編 狭間の物語

とある昼下がり。クロスベル警察、特務支援課の分室ビルの裏口に、寝そべっている一匹の狼——警察犬として登録されているが——ツアイトがいる。

日差しから当たる太陽が気持ちいいのか、時々大きなあくびをかく。その証拠に、ツアイトの毛がフカフカになっている。

と、何か音を聞いたのか耳をピクリと動かし、閉じていた目を開きそちらを見やり、近づいて来る人物を一瞥すると再び目を閉じる。近づいてきた人物はそんな反応をしたツアイトの頭を撫で、持っていた大皿から何かを一切れ取り出し、彼に差し出した。

ツアイトは訝しそうに見やったが、それを見ると立ち上がり、美味しそうにパクつき始める。

「よー、ツアイト。元気にやってるか？」

「グルルウ……ウオン」

「そうかそうか……（ティオじゃないから何て言ってるのかわからん）」

ツアイトの頭を撫で、微笑みながらそんなことをアルストは思った。ちなみに、彼が持って来たのはアップルパイである。焼きたてなので、いいにおいをももしたしており、メチャクチャ美味しそうだ。彼はそのままツアイトを通り越し、ビルの裏口から中に入っていた。そのまま下に降りる階段を下り、

「ども〜！こんにちは〜！」

元気良く声を張り上げる。

「誰だ〜？つてアルか」

声に反応したのか、ランディがよっと片手を上げて応じた。

「どうもです、アルさん」

「あら、こんにちは。……その手に持っているものは？」

テイオも挨拶し、エリイはアルストが持っているものを見て首を傾げた。彼は一つ頷き、

「ああ、お菓子の差し入れだ。アップルパイを焼いたんでな」

そう言つて近場にあるテーブルにアップルパイを乗せた大皿をゴトツと置く。

アップルパイが放つ香ばしい匂いに一同感心する。

「おお、美味そうな匂いじゃねえか」

「これ、アルさんが焼いたんですか？」

「そうだぞ」

「……では、いただきます」

テイオがアップルパイに手を伸ばし、一口食べる。すると、目が大きくなり微かな驚きを持ってアルストの方を見た。

「想像通り、とてもおいしいです……！！」

大絶賛。どことなく目をきらきらさせている。それを見て、アルストは苦笑しつつそうか、と頷いた。

「へえ、どれどれ……。……メチャクチャうめえ！」

「ホント……。とてもおいしいわ」

ランディ、エリイもニコニコ笑いながらそう言う。アルストも、

「いや、喜んでくれてありがたい。作ったかいもあるってものだ」

うんうんと頷きながらそう言い、ふとあたりを見渡して気づいた。

「あれ、ロイドは？」

「ああ、あいつなら支援要請の後始末。もう少しで帰ってくると思うが……」

まさに彼の言葉を聞いたようなタイミングで支援課ビルの扉が開いた。

「ただいま……って、良いにおいがするな」

「よ、お疲れ」

「後始末、もう終わったの？」

「ああ、そんなに時間もかからなかったし。……何でアルがいるんだ？」

彼の問いかけにアルストはテーブルに置かれた大皿に目を向けて答える。

「アップルパイを焼いたんでその差し入れだよ。食べるんなら手、洗ってこい」

どごそのお袋さんかお前は、的なセリフを吐いき、ロイドは「はいはい」と言いつつも、きちんと手洗いに行った。

「あ、私紅茶でも淹れてくるね」

おまけに、エリィのその一言で、支援課はすっかり休憩タイムとなった。

~~~~~

「……質問なんですけど」  
「ん？」

席についてアップルパイと紅茶を飲んで休憩している中、ティオがアルストに向けてそう言った。

「アルさん、どこか料理店…特にお菓子屋さんとかで働いているんですか？」

「いや、今は恥ずかしながら無職ってところ。パティシエにでもなるのかなとは思ってたんだけど……。やっぱり趣味の範囲を超えないしな」

ははは……と苦笑いをしてアルストはそう答える。そして、さらに聞かれるであろうことも、先回りしてついでに答えてやった。

「いつも思うんだけど、これは趣味の範囲を超えてるだろ……」

「あら、もったいないわ。これぐらいだったらどこでも雇ってくれるでしょう？」

「そうそう、これだったら俺は常連になるぜ」

「アンタはどちらかというと歓楽街の常連だろうが……」

「否定はしない」

一つ頷いてランディはそう答えた。てか即答かよ……。って、歓楽街と言えば。

「そうそう、クロスベルタイムズ見たぜ。お手柄だったみたいだな」  
アルカンシエルで起きた、市長暗殺未遂事件の事を思いだし、彼はニツと笑いながらそう言ったが、何故か皆、ぎこちない笑みを浮かべるだけだった。特にエリイの複雑な表情が気になった。  
彼らの表情の変化に戸惑いを隠せず、アルストは首を傾げた。

「えーっと……エリイ、俺、何か気に障るようなこと言った？」  
「……ううん、大丈夫よ」

そうは言っても、優れないことは変わりないんだけど……。そう思い、彼はロイドに聞いてみた。

(エリイ、何かあったのか?)

(……暗殺未遂を犯したの、市長の秘書だったろ)

(ああ、それが……。……。あれ?)

そう言えば彼女、名字なんて言ってたっけ。確か……。マグダエル？

(あ……。……。やっちゃまった……。)

自分の失態にようやく気がついた。彼女が市長の娘ーいや、年齢を考えると孫あたりか。だとすると、その秘書との関わりも深かったのだろう。

信頼していた人が、自分の祖父を殺そうとしたのだ。意気消沈するのも無理はない。

「あーっとー。そうだな……。うん、何か悩みがあるんなら、ため込まない方がいい。無理にでもはき出しちまえ」

「アル……」

そう言っつて紅茶をすすり、

「幸い、アンタの周りにはいつでも相談に乗ってくれる奴がいるんだしさ。この際、頼っちまえ」

言いたいことは全部言った、とばかりに彼はカップをソーサーに戻す。すると、聞いていたロイドが、

「……人はみんな、何かしら悩みを抱え込むよ。でも、アルの言うとおり、抱え込みすぎるのもよくない」

……何言っつてんだコイツは、とばかりにアルストは彼の方を向いた。

「だから、何か相談したいときは遠慮なく頼っつてきてほしい。それがー”仲間”だろ？」

「ロイド……。……ええ、ありがとう」

ロイドお前……。！そしてエリィ、アンタも何でそんなうれしそうな顔をするんだ！ 外野にいる三人は、いたたまれない空気の中、ひそひそと言葉を交わす。

(………何ですか、この雰囲気は)

(元はと言えばお前のせいだ！)

(い、いや、あれは場の雰囲気を少しでも変えようとな……。てかそれよりも！)

一つ咳払いをして、アルストは恐る恐るロイドに話しかけた。

「……ロイド。お前、いつの間にそんな危険人物になったん？」

「はあ？」

「あー、いや、何でもねえよ……」

少なくとも、俺と一緒にいた時期は、そうでもなかった。……年上のお姉さん方には随分とかわいがられていたが、それだけである。そう思って問いかけたが、彼の表情を見て、問い詰める気をなくした。あの表情だと、天然だろう。それを聞いていたエリイも、ふうつとため息をついている。

……大変だろうな、あの調子だと。そう思ったアルストだった。

## 創立祭 一日目

本日はクロスベル創立記念祭。その名の通り、クロスベルが自治州として認められた記念日を祝うお祭りである。

元々クロスベルには観光名所が盛んにあり、その記念祭のすごさもあって例年多くの観光客がやってくる。特に今年は創立70年を迎えるため、やってくる観光客はいつもの記念祭よりも多くなることが予想されている。

人が多くなると言うことは、警察、警備隊はもとより遊撃士協会もその忙しさを遥かに増す。当然、特務支援課も忙しくなるだろうと思っていたのだがー！。

「はあ？ 休み？」

「ああ。この前の市長暗殺未遂を阻止したご褒美に、一日だけ休みをもらえたんだ」

「ー忙しい事を予想しつつも、イタ電のつもりでロイドのエンigmaに通信をかけたが、自身の予想を大きく上回る出来事が起こっていた。」

エンigmaを耳にかけ、目を瞬きながらアルストはふくと返す。

「良かったじゃねえか。記念祭の初日だけでも休みがもらえてよ」

「まあね。と言っても、初日だから大きなイベントはなかったよな？」

「……なんかあったような気がする。……何だっけな。てか、アルカンシエルの新作がある事ぐらいしか思い出せない」

「ああ、それはセシル姉に見に行こうって誘われているんだけど」

「ほほう、セシルさんと……って何？」

「……それってデート？」

アルストのマジな発言に、通信の向こうですっこける音が聞こえた。

『な、何言ってるんだよ。そんなことあるわけー』

「動揺した声で言っても説得力はないぞ」

『うるさいー！』

……怒られた。解せぬ。

気を取り直して、アルストは笑いながら、

「仕方がない、からかうのはここまでにしといてやる。と言っても、今日は俺も色々と見て回るつもりだからな。もしかしたらどこかですれ違つかも」

『はは、それもそうだな。てか、アルはもうセシル姉に挨拶したのか？』

「ああ、したぞ。……おかげで熱い抱擁ハグをかまされそうになった」  
苦々しく言う彼の口調から、その時の様子を想像したのか、通信越しで苦笑いをしている親友にアルストは気安く呼びかけた。

「んじゃ、運があつたらどっかで会おうぜ」

『ああ』

そう言ってアルストは通信を切った。

~~~~~

「そうだ、パレードがあつたじゃんか」

アルストは街を回り、忘れていた事を思いだした。一人うんうんと頷きつつ、近くの屋台で買ったたこ焼きを一つ口に含んだ。

「お、うまうま やっぱ祭りっていったらたこ焼きかチョコバナナ、焼きそばあたりかな？」

にこやかに笑いながらそれを食べ、色々な屋台を見て回る内、歓楽街に行き着いた。

「……そう言えばあいつ、アルカンシエルに行っているんだよな。いくな、今頃舞台を見てるんだろくな。……あら？」

ブーブーと不機嫌な声を出しながら不平不満を述べていると、ちょうど良く劇が終わったのか、そこから多くの人々が次々と出てきた。もともと歓楽街にいた人達を含め、多くの人達がそこにいたので大変混雑してきた。アルストはその人だかりを眺め、そのあまりの人の多さに少し困惑した表情となる。

「クロスベル、こんなに人がいたかな？……やっぱし三年ですんごいでかくなっただんな……」

少々寂しい思いを感じつつ、アルストはため息をつく。すると、やや離れたところから、

「あれ、アル？」

「およ？」

呼ばれた気がしたのでそちらの方を見てみると、ロイドとセシルがいた。二人はやっぱし、と言っふうに表情を明るくし、こちらに向

かっってきた。

「何だ、近くに來てたのか」

「適当にぶらぶらしてたらここに來てな。それより、アルカンシエル、どうだった？」

逆に聞き返すと、ロイドは感極まった声音で、

「いや、もうホント楽しかった！ありゃ熱狂的なファンがいるわけだよ」

と感想を述べていた。その内容と、声音で、どれほどすごい物なのかは若干想像が付かなかった。

「へへ。メチャクチャすごいんだな。今度見に行きてよ」

素直にそう述べると、彼の隣にいるグラマーこと、セシルが申し訳なさそうに言った。

「ごめんなさいね。チケット、あともう二枚あったらアルとランディ君も誘えたのに……」

「いや、チケット四枚は欲張りすぎじゃないすか」

アルストの言葉に、ロイドも苦笑いを浮かべて頷き、

「た、確かに四枚は欲張りすぎだよ。でも、ランディの方は気にしなくていいんじゃない。今頃、セシル姉の後輩達と楽しくやってるみたいだし」

「それに、お前らはお前らで別々にアルカンシエルのチケット貰ってるしな。……後でなんか奢るから、そのチケット、俺にくれ」

スツと手を伸ばしてチケットを要求するが、彼は「考えとく」の一言でそれを後回しにした。そんな二人のやりとりを見ていたセシルが、クスツと笑い、

「二人のやりとりを見ていると、懐かしい気分になるわ。それにしても、アルは変わったわね」

「変わった？俺が？」

「ええ。以前はブスツとした、愛想のない子だったのに。変われば変わるのもね」

笑顔でそんなことを言っただけの彼女に、ロイドとアルストはため息を漏らした。

「それ俺が拾われた頃の話でしょうが」

「セシル姉、それだいたい昔の事なんだけど」

二人そろって似たようなことを言う彼らに、セシルはただにこやかに笑っただけ。すると、彼女は何かを思い出したかのように、

「そうそう、この後イリアからメゾンで会う約束しているんだけど、二人も一緒に来る？」

「い、いや、やめとくよ。女性ばかりのところに野郎が来るのもなんだしさ」

「……辞退します」

ロイドはそう言いつつも内心、イリアさんにいじられそうだからなと付け足し、アルストは行くな！と第六感にも似た何かで感じ取った。

「そう。遠慮しなくて良いのに。それじゃ、また夕食の時にね」

二人の弟の行かない、と言う言葉に、そう返すと彼女は去って行った。その後ろ姿を見送り、ロイドはそつとため息をつく。

(はあ、兄貴みたいに積極的になれば良いのに……)

「……………」

その呟きが聞こえ、彼の思いを知るアルストはこう言うときなんと声をかければ良いのかわからず、ただ背中をバンバンと叩いてやる。と、

「あれ、ロイドさん？」

後ろから間延びした声がして、二人は振り向く。そこには姉妹がおり、一人は知っている人物だった。確か、星見の塔で付いてきた警備隊のノエル曹長。あの時のような警備隊の制服ではなく、私服である。

「あ、ロイドさんにアルストさん。お久しぶりです」

「お、おひさ。えっと、そちらは……………」

ノエルの言葉にアルストは微笑みながら返し、もう一人の髪を二つにまとめた少女の方を見やった。

「あ、初めまして。私、フラン・シーカーって言います！ 特務支援課、専属オペレーターです！」

「アルスト・コーデイ。よろしくな。って、専属オペレーター？」

「はい、その通りです」

元気よく自己紹介する彼女に笑いながら返し、彼女が最後に言った言葉を聞き返す。が、帰ってきたのはそれを肯定する言葉だった。いや、何なのかを聞いたかったんだが……、と内心呟く。

「そっか、フランはアルと会うのは初めてか。……二人とも、今日は姉妹でデートかい？」

「えへへ、そうです」

「はあ、本当は妹なんかとじゃなくて彼氏と来たかったんですけど……。そんなの作っている暇もないしな……」

にこやかに言うフランとは対照的に、ノエルの方はため息混じりに呟いた。

「会えないから別れよう、と言われるほど、警備隊って言うのは忙しいのかい？」

アルストがははは、と笑いながら冗談交じりにそう言った。すると彼女は、こくと頷く。

「……ごめん、変な事聞いたね……」

冗談交じりで言ったのに、まさかビンゴとは……。時折、自分の素質（ニュータイプとしての）が怖くなるよ……。

「いや違うから」

「違います」

「違うと思います」

「……え〜」

三人の同じ否定の言葉に、地べたに座ってのの字を書きたくなるほ

ど落ち込んだ。手もぱたぱたと左右に振っているし。そんなアルストをほおつて置いて、二人はロイドに問いかけた。

「そう言えば、お二人は何をしていたんですか？」

「ああ、さっきまで連れがいたんだけどね。用事があるから別れて、あてがなくなつたんだ」

それを聞いて、二人は顔を見合わせ、ひそひそと小声で会話を交わす。

(ねえねえお姉ちゃん。それって……)

(うん。多分振られたんだと思う。声をかけたときも、アルストさん、励ましている風にも見えたし)

(……なるほど)

フランはそう思い、未だに落ち込んでいるアルストへの認識を改めた。ちなみにさっきまでの認識は只たんの「面白い人」であった。それは置いておいて。

「？(なんか勘違いされてる気がする)」

二人の雰囲気を見てロイドはそう思い、声をかけようとするがそれより先にフランが、

「あの、私たちこれから湾岸区のライブを見に行くんですけど、よろしかったらどうでしょうか？もちろん、お二人とも」

「え、でもいいのかい？せっかくの姉妹水入らずを……」

「いえいえ、気にしないで下さい　ロイドさんとアルストさん以外だったら全力で拒否しますけど！」

「あのねえ……」

ふうつとノエルはため息をつき、そのスキに復活したアルストが、

「ま、行こうって誘ってくれてんだから、行こうぜ。ほれ、気分を変えてさ！」

「……そうだな。よし、行こうか」

ちなみに、ニツと笑いながら言うアルストのその言葉を聞いて、シカー姉妹は勘違いをより強固な物にしてしまった。

(これは……)

(うん、もう確定だね)

そういうことで、彼を二人で挟みーロイドからしてみれば両手に花状態ーとなり、そのまま歩き始めた。

「ちょ、二人とも……!?!?」

「まあまあ、気にせずに。両手に花ですよ」

「……うらやましい限りだな、おい!馬に蹴られて死んじまえ!」

一人ぼつんと後ろから付いてくるアルストは、ロイドにそう罵声を浴びせた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3709w/>

---

零の軌跡 一つの奇跡

2011年10月19日09時16分発行